

成長で幸福は得られるのか

月尾 初対面の清水先生に失礼と思いつながら、今日はあえてネクタイを外してきました。世界一貧しい大統領として有名なウルグアイのホセ・ムヒカ前大統領が「日本人は西洋の悪い習慣を真似して、根源を忘れてしまった」と言われていると聞いて、日本人の「名誉」のために外してきたのです（笑）。ムヒカ前大統領は、二〇一二年の国連のリオ会議で、加盟百九十三か国の最後に登壇し、「貧しい人とは少ししか持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」と演説されました。多くのものを犠牲にし、経済優先社会を築いて

きた西洋に対する痛烈なメッセージです。

日本も戦後、経済優先で短期間に有数の工業国家となり、「ジャパン・アズ・ナンバートワン」といわれるほど経済発展を遂げましたが、それで幸福な国家になったのかといえれば、必ずしもそうではない。その原因を考える時に参考となるのが、『論語』の「寡きを患えずして均しからざるを患う」という言葉です。日本人全員が等しく貧しいのであれば誰も不幸とは思わない。

〈対談〉

日本企業二〇〇年先への海図を描く

転進すべき時は今

シンガポール国立大学教授

清水千弘

しみず・ちひろ

昭和42年(1967年)、岐阜県大垣市生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科社会学専攻博士後期課程中退、東京大学大学院新領域創成科学研究科博士(環境学)。勲日本不動産研究所、(株)リクルート、麗澤大学経済学部教授等を経て現職。専門は経済統計、住宅・不動産政策、マーケティング。キヤノングローバル戦略研究所上席研究員、マサチューセッツ工科大学研究員、香港大学・麗澤大学客員教授。



先へ

しかし一部に豊かな生活をする人が現れて、不公平を感じた時に、自分は不幸だと思ってしまう。

清水 格差ですね。日本のジニ係数(所得分配の不平等さを測る指標)は、ゆるやかに上昇してきています。

月尾 かつては「世界で一番成功した社会主義国家」と揶揄されるくらいでしたが、いつからか等しくなくなりました。経済は成長したものの、幸福実感が乏しい大きな原因がここにあると思います。次の百年に向け、どう変えていくかが重要です。

清水 私は修士論文で、都市インフラの老朽化をテーマにしたのですが、日本は戦後、産業関連のインフラ整備を最優先し、高度経済成長を遂げました。その後、生活関連のインフラ整備が求められてきたにもかかわらず、転換せずに経済優先で走ってきてしまった。国としてお金の使い道を誤ったことが、地域、教育、環境など、さまざまな格差が広がる一因のように感じます。

月尾 日本の国家政策は九〇年代から、おかしな方向に向かい始めています。アメリカ政府から、日本改造を目的に

した「年次改革要望書」が突きつけられるようになり、利益をひたすら追求する「強欲資本主義」の社会政策、経済政策が顕著になりました。かつての幸福な社会から遠ざかっていくばかりです。

清水 アメリカ型の追従という点では、教育もそうかもしれません。多くの大学の経済学の講義では、最初の講義で資源の希少性と市場の効率性から教えます。市場のパイを最大化させるため資源をどう効率的に配分するかを一番に教えるわけです。私

はそのアンチテーゼとして、入学直後の学部生に対し、人生の「幸福」とは何かを考える課題を出すことを常としていました。経済成長では図れない「幸福」をどう教えるか、大きな課題ですね。

共有地はなぜ残ったのか

月尾 経済学を専門と

撮影/能仁広之

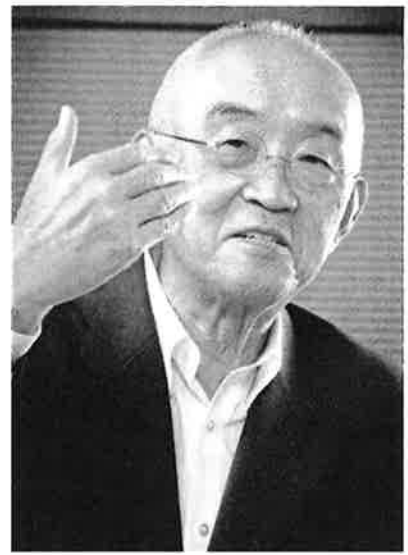
東京大学名誉教授

月尾嘉男

つきお・よしお

昭和17年(1942年)、名古屋市生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学工学部教授、東京大学工学部教授、総務省総務審議官等を経て、平成15年、東京大学名誉教授。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、メディア政策等を研究。全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と環境保護や地域計画に取り組む。著書に『100年先を読む』(モラロジー研究所)、『地球千年紀行』(清水弘文堂書房)など多数。





は成り立たないという論文です。この理論がいかにおかしいかを実証しようと、テレビジョン番組の制作をかねて、世界各地の先住民族を訪ねながら検証しました。

例えばモンゴルは、第二次大戦後に中国が南側を内モンゴル自治区とし、牧草地は私有地に分割されました。北側のモンゴル国は依然として共有地です。二、三十年後どうなったかといえば、北側の共有地は緑が残り、南側の自治区は荒れ果てて砂漠になったのです。

清水「コモンズの悲劇」とは正反対の結果になったのですか。

される方に失礼ですが、私は昔から「経済学は勉強するな」と言っています（笑）。七十億人がそれぞれの欲望を持つて行動している社会を、限られた方程式で理論化するのは、そもそも無理なことです。例えばアメリカのギヤレット・ハーデインの「コモンズ（共有地）の悲劇」は経済や環境を学ぶ際の必読資料となっていますが、これは間違っています。

ある牧草地を九等分し、真ん中を誰もが自由に利用できる共有地、周辺の八区画を個々の牧場主の所有地とし、羊を放牧します。誰もが羊を共有地へ送り込むために荒廃がすすみ、共有地

もう一度取り戻すことが必要ではないかと思えます。

清水 日本は財政赤字は膨らむばかりですが、その根底には、日本人が分かち合いや共有という視点を忘れ、個に走りすぎたことが一因だと思います。

子育て一つとっても私が幼い時は学童保育などなくても、近所の人が預かったり、一緒に遊んで育ててくれました。家族・地域みなで支え合い、分かち合うから、コミュニティが維持され、行政や国の負担も少なくてすんだのです。現代はコミュニティが機能しなくなり、個人主義が強くなったため、子供や老人の面倒は国でとりました。このまま進めば、国家財政は破綻するでしょう。私たち世代が成長のために、公共、共有の財産を先食いしてしまい、そのツケを子供たちや次の世代が支払わなければならないと思います。GDP成長を手にしたにもかかわらず幸福感が乏しいのは、そのために犠牲にしたものが大きすぎたのだと思いますね。

月尾 二〇一五年のノーベル経済学賞は、消費と幸福度を理論づけたアンガス・ディートン博士でした。かつては

バブル経済を助長するような理論の選考に疑問を感じていましたが、方向転換してきたようで希望を感じています。

人と会社が長寿な日本の特異性

清水 私の専門である応用計量経済学では、物価やインフラ、不動産などさまざまな財・サービスまたは資本の経済価値を測定したり、予測したりしますが、最近取り組んでいるのがワーキング・クオリティ（労働の質）と幸福度の研究です。伝統的な経済学では、働くことは苦痛でありその対価として賃金がある、労働の不幸が大きいほどお金をたくさん得られる、という見方です。実際にアメリカ人は、いかに早く労働から抜け出し、余暇を楽しみ、遊んで暮らすかを考えて人生設計をします。一方、日本人は世界的に見て労働時間は長いのですが「働かされ感」は圧倒的に低い。人間が働く意味づけが、日本は欧米とは異なる部分がありますね。

月尾 西洋では旧約聖書の楽園追放のエピソードにあるように、労働は人間

の罪に対する罰ととらえ、英語の「レイバー」は奴隷を表す「スレイブ」が語源という説もあります。一方、神道を背景にする日本では、労働とは奉仕であり、働くこと自体が喜びととらえます。根源の精神が異なるわけです。ただ日本がそうであったのは明治以前の話であって、経済成長とともに変質しつつある点が問題です。

私はこう答えました。「仕事というのは、どれだけたくさん『ありがとう』を言われるかで価値が決まる」「そんな価値ある仕事で社会に貢献するために人は働くんだよ」と。そうしたらその子が、ポロポロ泣き始めたんです。モノを売って「ありがとう」と言うだけでなく、買ったほうも「ありがとう」を言う。月尾先生がおっしゃるように、働くこと自体が喜びという感覚が日本人にはあります。アメリカのように早期リタイアをする社会より、七十五歳になっても「ありがとう」と言われて働き続けられる環境のほうが、日本人には幸福なのかもしれません。



月尾 そうした特有の労働観と、日本に長寿企業が多数存在していることは無関係ではないと思います。日本は事業を通じて社会貢献することを喜びとし、利益拡大より、少しでも長く存続することに価値を置く企業が多いいからだと思います。「欲望」を拡大していかない。そこに持続する理由、幸福の源泉があることを日本の経済社会は示してい

るように思います。

人口減少は怖くない

清水 日本は今後、人口減少が続き、十五歳から六十四歳までの生産年齢人口は二〇一〇年から二〇三〇年までの二十一年間で約千四百万人減となります。

その対策が検討されていますが、私は定年を延長し、七十四歳まで「ありがとう」と言われながら働ける社会にすることが、最もいい選択と考えています。そうすれば二〇一〇年のGDPが二〇四五年でも維持できるという試算を出しました。

月尾 それは移民を受け入れるより、確かにいい考えです。私は人口減少を補う案として、ロボットを社会全体に導入させてはどうかと考えています。根拠は二つあって、一つは日本が世界一のロボット大国であり、技術の蓄積があること。もう一つが、これだけ発展した工業大国ながら、自然を崇拝するアニミズム文化を維持している唯一の国であることです。日本のアニミズムはすべてのものに魂があり、神が宿

ると考える「物人対等の思想」が根底にあります。ロボットに対する違和感を抱きにくい、これは大きな利点です。欧米では、ロボットに介護されることを屈辱と感じる人が多いのに対し、日本は歓迎する高齢者が約九割もいる稀有な国です。ロボット共生社会をいち早く実現する国家戦略を選択すべきです。

清水 私はビッグデータを用いた社会分析、経済分析をしている関係で、広い意味でAI（人工知能）も専門ですが、月尾先生のおっしゃるとおり、日本はもつと特化するべきだと思います。以前、オックスフォード大学がAIや情報技術の発展によつて、消滅するであろう仕事の順位を発表し、話題になりました。そうなる時に大事なのは、サイエンスとアートの融合であり、人間にしかなしえないアートの部分を追求していくことだと思っています。

月尾 同意見です。進歩したAIでも侵食できない領域、人間のアートの世界に移っていくことです。アート（ART）というと美術や音楽を思い浮かべがちですが、英語の元の意味は「人

工」で、「自然」に対する概念です。AIの基本は過去のデータに基づくパターン認識ですから、無から有をつくりだす人間本来の創造性を磨き上げれば、棲み分けができるはずですよ。

清水 例えば、住宅取引の場合、インターネット上で条件に合う売主と買主を素早くマッチングする業務は、AIの得意分野です。ところが、買いたい人がその家を買ってどんな生活をしたのか、家族とどんな時間を共有したのか、人生の最期をどう迎えたのか、そんな話を直接聞き、共感・共鳴しながら、ふさわしい住宅を探し出す。心を働かせ未来を創造していく仕事は、人間にしかできません。

情報革命に生き残る企業の針路

月尾 就業の形態を変え、AIやロボットと調和する社会を築けば、人口が半減しても、百年後まで日本は十分に社会を維持できます。そのような高度な情報社会に対応していくうえで、重要なキーワードが「多様」です。日本がかつて工業社会に大転換できたのは、

国民の価値観や社会制度の「画一化」に成功したからです。しかも、情報社会への転換に必要なのは「多様化」です。情報の最大の価値は「違う」ということにあり、どうして「違い」を創造できるか、あらゆる人や組織、社会が多様ということを意識していかなければ、いくら技術だけ進歩しても、情報社会は成功しません。

清水 「多様」はこれからのキーワードですね。地方創生を進めるにしても、文化や仕事、生活環境に多様性がなければ、魅力的な空間はできず、人は集まりません。私はいくつかの大都市で、「ITとファイナンスを融合させた地方創生プラン構築」というプロジェクトを始めます。今、各地に「空き家」が増殖していますが、これはゴミではなく、十分に利用可能な地域資源でもあります。そうした資源を活用するためにも、地域に眠る多様な情報をAIを用いて必要とする人とマッチングをし、地方資産として再生していくことをしたいんです。

月尾 「情報」には二つの側面があつて、一つはニュースのように少数の人間が

占有するほど価値が高まる側面、もう一つは、音楽や小説のように多数の人が共感するほど価値が高まる側面です。後者を区別する意味で「情緒」と言っています。多くの人がこの「情報」と「情緒」を区別せずに理解しています。情報社会になってもロボットやAIにできないのが「情緒」の領域であり、清水先生が大都市でされようとしていられるのもそうです。

多くの人が共感し、精神的に分かち合い、気持ちを一つにできる仕組みや製品、サービスを創造していけば、いかに情報技術が進もうとも、決して恐れることはありません。

清水 AIや技術に使われるのではなく、たくさんの人に「ありがとう」と言われる仕事を創るためにどう活かすのか、経営者はそこをよく考えて、大企業ができない需要を丁寧掘り起こせば、怖くはないですね。

月尾 現代は明治維新に匹敵する大変革の時代と

いわれますが、この変革を成功させるために、現代のリーダーが明治にならって取り戻すべき精神があります。ムヒカ前大統領は「日本人はかつて名譽を重んじる民族だった。しかし、現在はその精神を失っている」とズバリ指摘されました。明治のリーダーにとって「劣等国として見下されることは耐え難い」という「名譽」を重んじる気持ちこそが変革の原動力だったわけですね。

日本が国際的地位を下げつつある現代、国民の心を一つにする名譽の精神を取り戻すこと、そこから百年先への未来が開かれるはずですね。

